～関東大震災の復興、台湾電力の父～

松木 幹一郎

写真１：晩年の松木幹一郎
（参考文献１より）

明治～大正～昭和初期の官僚、実業家。
先進的政治家である後藤新平を助けるとともに、郷里の有能な人材を後藤に紹介し、活躍の場を与える。関東大震災の復興に当たり、土地区画整理の実行を決める。その後、長年に渡り中断していた台湾　日月潭における水力発電事業を完成させる。

経　歴

明治５年（1872 年）	愛媛県西条市河原津 に生まれる
明治 29 年（1896 年）	東京法科大学卒業後、逓信省勤務
大正５年（1916 年）	山下汽船会社理事就任
大正 12 年（1923 年）	財団法人東京市政調査会初代専務理事
大正 12 年（1923 年）	帝都復興院副総裁
昭和４年（1929 年）	台湾電力株式会社社長
昭和 14 年（1939 年）	社長在任中、急逝（６７歳）

1　後藤新平との出会い

写真２：明治 39 年（1906 年）　日本代表としてローマで開催された第６回万国郵便連合会議に出席（前列左が松木、前列右は後に台湾総督となる川村竹治）

写真３：宇和島市指定史跡「高野長英居住地」の後藤新平の書による石碑

松木幹一郎は明治５年（1872 年）に現在の西条市河原津に生まれました。明治 29 年（1896 年）に東京法科大学（現在の東京大学法学部）を卒業後、逓信省（郵便や通信を所管していた省庁）に勤め、広島郵便局長・文書課長・横浜郵便局長などを歴任しました。

明治 41 年（1908 年）に、松木が鉄道院秘書課長となったときの逓信大臣兼鉄道院総裁が後藤新平でした。後藤は松木の有能さを認め、重用しました。このときに、松木は十河信二（新幹線の父）などの有能な愛媛県出身者を後藤に紹介し、彼らはその後大きく活躍しました。

宇和島藩に匿われていた幕末の蘭学者　高野長英は後藤の親族であり、宇和島市指定史跡「高野長英居住地」には、大正 14 年（1925 年）に後藤が宇和島を訪れた際に記した石碑が残っています。

明治 44 年（1911 年）、東京市が路面電車の営業と売電事業を始めたことから、後藤は松木を東京市初代電気局長に推薦しました。

その後、大正５年（1916 年）に愛媛県宇和島市吉田町出身の山下亀三郎に請われ、山下汽船会社に移りました（松木は後に副社長に就任）。大正 11 年（1922 年）に、後藤が財団法人東京市政調査会を設立すると、松木はその初代専務理事に就きました。

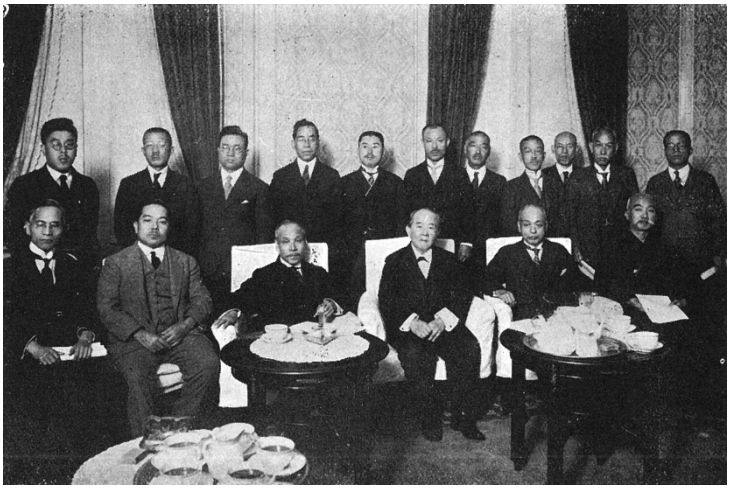

写真４：道路改良会幹部　前列左から２人目が松木幹一郎理事、３人目が水野錬太郎会長、４人目が渋沢栄一顧問（参考文献７より）

また、松木は道路の重要性を早くから予見し、道路法が制定された大正８年（1919 年）には、現在の日本道路協会の前身に当たる社団法人道路改良会を設立するとともに、自らも理事に就任し、道路の普及に努めました。

2　関東大震災の復興計画を決める

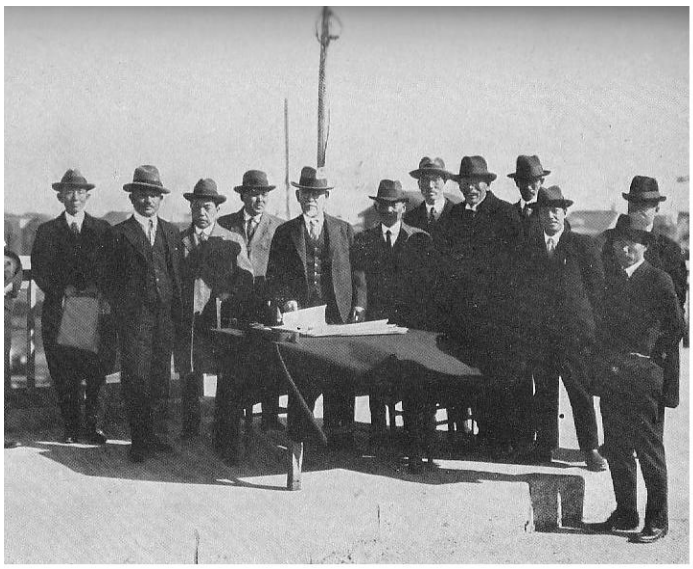

写真５：後藤新平一行の帝都復興事業の視察　左から３人目が松木、５人目が後藤新平（参考文献１より）

大正 12 年（1923 年）９月１日に関東大震災が発生すると、内務大臣であった後藤は、震災復興のために自ら総裁とする帝都復興院を設置しました。後藤は、松木を副総裁に、十河を経理局長に任命します。

後藤は東京市政調査会などで研究していた「都市計画」の手法を復興に役立てました。どのように復興を進めるかについて、帝都復興院内部でも意見の対立がありましたが、松木や十河らが主張した全面的な土地区画整理が採用されました。

大正 13 年（1924 年）２月に、帝都復興院が廃止され帝都復興局に縮小されると、後藤とともに松木も辞任しました。松木が帝都復興院に在籍していたのはわずか５ヶ月間でしたが、このときに決めた復興計画は今日に続く東京の都市づくりの基本となりました。

その後、松木は東京市政調査会専務理事に戻り、現在も日比谷公園にある東京市政会館及び日比谷公会堂の建設に力を尽くしました。

東京市政会館は昭和４年(1929 年)10 月に完成し、昭和５年(1930 年）３月には帝都復興完成記念式典が開催されますが、後藤はそれらを見ることなく昭和４年（1929 年）４月に亡くなりました。

東京市政調査会は、「公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所」と名前を変えて、現在も存続しています。

3　日月潭水力発電事業を完成させる

図１：日月潭の位置図

当時、日本の植民地であった台湾では、台湾中央部にある最大の湖　日月潭を利用する水力発電事業を行うために、大正８年（1919 年）に台湾電力株式会社が設立されました。しかし、第一次世界大戦や関東大震災により、多額の費用を必要とする建設工事は大正 15 年（1926 年）に中止が決まりました。

既に2500万円を投資していた日本政府は、機会があれば日月潭での水力発電事業を再開したいと考えていました。

昭和４年（1929年）12月、日本政府は松木を台湾電力株式会社社長に選びました。

昭和５年（1930年）１月、松木は台湾着任後すぐに当時の最も権威ある専門家を集め、工事計画の見直しを行いました。その結果、残りの必要な工事費は4860万円と算定されました。この年の日本の実行予算は16億1000万円であり、必要工事費はその約３割に相当しました。日本国内ではこの資金を集めることができないため、外国から借金して集めねばなりませんでした。

その内容は、台湾最長の河川である濁水渓に高さ48.5mのコンクリートダムを設置し、そこから日月潭までの延長 15.1km の間を８本のトンネル、３箇所の開水路、４箇所の暗渠で、毎秒約40㎥の水を送るものです。そして、日月潭湖畔に２箇所の土堰堤（合計延長約400m、高さ20～30m）を築き、湖の水位を約18m上昇させて、日月潭の水を約3000mの水圧トンネルと約640m　５本の水圧鉄管により約330m下の発電所に送る大規模な工事でした。

写真６：日月潭建設工事での松木幹一郎（中央）

当時は、世界恐慌などの経済情勢だけでなく、国際政治情勢も第二次世界大戦前の混沌としていた時代ではありましたが、昭和５年（1931年）６月に外国に債券を売却することができ、必要な工事費を確保し、昭和６年（1931年）10月に工事着手することができました。

松木はこの他にも様々な多くの課題を乗り切り、昭和９年（1934年）に日月潭第一発電所、昭和12年（1937年）には日月潭第二発電所を、それぞれ完成させました。日月潭第一発電所は最大出力 10 万

写真７：日月潭から５本の水圧鉄管により大観発電所（旧日月潭第一発電所）へ導水

写真８：大観発電所（旧　日月潭第一発電所）内部の状況（建設当時とほとんど同じ機械で運転）

写真９：平成 22 年（2010 年）に復元された日月潭湖畔の松木胸像

kW であり、当時、東洋一の規模を誇りました。しかし、松木は社長在任中の昭和 14 年(1934 年) 6 月に 67 歳で急に亡くなりました。

第二次世界大戦後、日月潭第一発電所は大観発電所と名前を変え、戦後の台湾の経済復興に貢献し、建設当時と変わらずに現在も運転を続けています。発電所内の広報室では発電所の由来や歴史などについて日本語による映像説明も備えられています。また、日月潭は日月潭国家風景区に指定され、台湾有数の観光地となっています。

松木の胸像は死去翌年の昭和 15 年（1940 年）に日月潭湖畔の発電所への取水口に建立されていましたが、第二次世界大戦中の金属供出で台座のみが残されていました。平成 22 年（2010 年）３月に、台湾電力株式会社を引き継いだ台湾の方々が、松木を「台湾電力の父」として顕彰するとともに、残された台座上に胸像を復元しました。

写真１０：松木幹一郎墓

松木幹一郎の生家跡と墓地は、西条市河原津地内の国道 196 号沿いに残っています。

＜参考文献＞

１）松木幹一郎伝記編纂会、1941、『松木幹一郎』、後藤曠二

２）山岡淳一郎、2013、「松木幹一郎」、『日本人、台湾を拓く。』、まどか出版、p241-264

３）湊照宏、2011、『近代台湾の電力産業－植民地工業化と資本市場－』、お茶の水書房

４）緒方英樹、2015.3、「郷土の土木偉人を顕彰するということ－八田與一から、日月潭水力発電事業に挑んだ松木幹一郎など－」、『土木史（近代化への道⑩）』、月刊建設、（一社）全日本建設技術協会、p47-50

５）越沢明、2011、『後藤新平－大震災と帝都復興－』、筑摩書房　ちくま新書

６）有賀宗吉、1988、『十河信二』、十河信二伝刊行会

７）工事画報社編、1926、「道路改良会の幹部」、工事画報社、『土木建築工事画報』第２巻第２号、p18（土木学会土木図書館所蔵）

８）新井栄吉、1934、「愈々七月発電を開始する日月潭水電工事」、工事画報社、『土木建築工事画報』第 10 巻第７号、p39～46（土木学会土木図書館所蔵）

（文中の写真２、６は松木幹一郎末娘　景山郁子様、写真７～９は西条市楠河歴史研究会様、写真４は土木学会附属土木図書館様より、それぞれ提供していただきました。）